

社会的な思考・判断にかかわる能力を育む指導の工夫

～基地を通して～

那覇市立金城小学校教諭 諸喜田 繁

テーマ設定理由

人間関係の希薄化が著しい現代社会において、他者への無関心が引き起こす事件事故は、後を絶たない。学校教育においても、社会に積極的にかかわっていかこうとする態度を育むことが大きな社会的要請となっている。

小学校学習指導要領解説社会編によると、豊かな人間性を育むためには、児童が社会事象に関心を持って進んでかかわり、それらの意味や働きを多面的に考えるとともに、児童の発達段階を考慮して社会的事象を公正に考えたり判断したりできるようにすること、つまり、社会的な思考・判断にかかわる能力を育むことを求めている。

これまでの実践をふり返ってみると、社会に積極的にかかわっていかこうとする態度を育むため、社会的事象について問題解決的な学習を行ってきたが、効果的な資料の提示や調べ学習の時間の確保など、手だてが不十分であったため意欲づけが弱く、学習が深まらないことが多かった。そこで、資料の精選や提示方法・発問の工夫、多様な調査対象・方法が想定される教材を学習の中に組み入れること等の指導の工夫の必要性を実感した。

本研究では、児童が社会に積極的にかかわっていかこうとする態度を育成することが目標である。社会に積極的にかかわっていかこうとする態度とは、社会的事象を自分の問題として捉え、解決していかこうとすることである。そこで、基地を通して人とのかかわりを重視した問題解決学習(対話型問題解決学習)を展開する。その理由として、基地が沖縄に集中しており資料を入手しやすい点、関係者が身近にいることから調査を多様な方法で行うことができる点、基地にかかわる人々がそれぞれに多様な立場に立っている点が挙げられる。また、対話型問題解決学習の展開において調査活動・ワークシート・児童の考えを共有化するための指導・発問を工夫することで、児童の社会的な思考・判断にかかわる能力を育むことができると考えるからである。

このような学習を展開することが、児童の社会に積極的にかかわっていかこうとする態度を育むことにつながると考え、本研究テーマを設定した。

研究目標

社会に積極的にかかわっていかこうとする態度を育むための指導のあり方について研究する。

研究方針

- 1 基地を通して、社会的な思考・判断にかかわる能力を育む指導の工夫について研究する。
- 2 小学校社会科における基地に関連する学習単元表を作成する。

研究構想図(略)

研究内容

1 社会的な思考・判断にかかわる能力について

学習指導要領解説社会編によると、社会的な思考・判断にかかわる能力に関する目標については、次のように示されている。「能力に関する目標は、各学年のすべての内容とかかわっており、理解に関する目標や態度に関する目標と相互に関連をもちながら育成されるものである。また、児童の発達段階や学習経験に応じて、系統的、段階的に育成されるものである。」その上で、第5学年では、「社会的事象の意味について考える力を育てるようにすること」を求めている。

2 社会的な思考・判断にかかわる能力を育む指導の工夫

社会的な思考・判断にかかわる能力に関する目標を具現化するためには、第5学年の内容全体の指導を通して、我が国の産業や国土に関する社会的事象を具体的に調査したり、地図や統計などの基礎的資料を効果的に活用して調べたり、さらに、調べたことを目的に応じた方法で表現したりすること、調べたことや表現したことに基づいて、社会的事象の意味を考えることができるようにすることが大切である。

そこで本研究では、対話型問題解決学習(図1)を展開する。対話型問題解決学習とは、教師の適切な指導のもとに調べ学習を展開し、一人一人が自分なりの考えを得る。それを活かし、対話という手段で、問題解決をするための学び合いを展開する。この場合の対話は、自己内対話、自己外対話(人・ものとの対話)を含む。対話で得たものを思考し、さらに表現することで、集団として学び、高まり合うことができると考える。このような対話型問題解決学習を展開する手だてとして、以下の4点を工夫する。

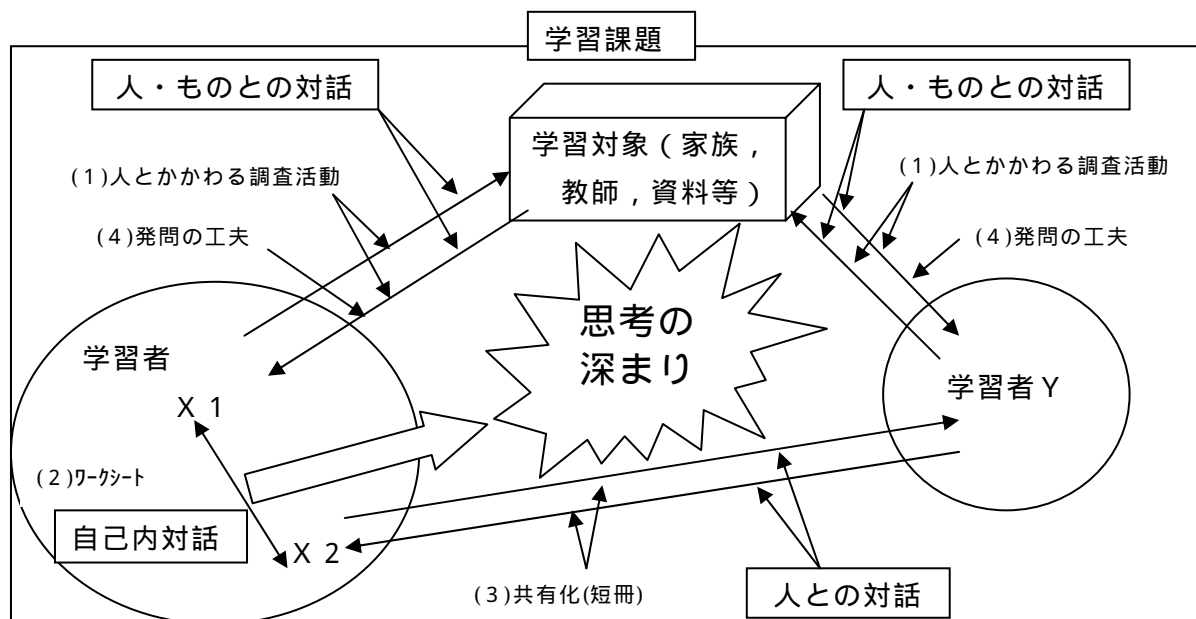


図1 対話型問題解決学習のイメージ

(1) 人とかかわる調査活動

本研究では、「基地にかかわる人々の住みよいくらし」について調査活動を設定する。自分なりの考えを導くためには、意欲的な調査活動が不可欠である。そのために、児童一人一人が人とかかわる調査活動を重視する。学習対象も、様々な人とふれあえること、多様な方法で調べられること、児童にとって身近であることが望ましい。「基地」は、このような条件を満たしている。具体的な調査方法としては、インタビュー、FAX、電

子メール，電話，インターネット，書籍，統計資料などが挙げられる。また，調査過程で入手した統計地図，グラフ，図表などの読みとりを重視し，くりかえし指導することで，資料から情報を確実に見つけ出し，疑問点を発見できる能力を伸ばす。このように人とかかわる調査を主とすることで，社会的事象（基地）について興味関心が高まり，児童の生活と社会的事象をつなぐことができると考える。さらに，人とかわり調べることの楽しさを児童が感じることで調査への意欲も期待できる。

(2) 児童の変容をみとめるためのワークシート

本研究では，授業の導入段階用，調べ学習の計画用，調べ学習用，学び合い用という4種類のワークシートを使用する。4つの学習過程を通して，基地とのかかわりで児童の住みよいくらしへのとらえ方がどのように変わったかを記入させる。それにより，児童自身が自己の変容を確認できる。また，教師は，実践をふり返り，児童の変容を評価に反映させることができる。（図2）

(近所の人につ 「住みよいくらしと環境」社会科ワークシート(その4)

「住みよいくらしと環境」社会科ワークシート(その3)



<p>学習課題「基地に関わる人々の住みよいくらしとは何だろう」 調べ学習用ワークシート</p> <p>◎住みよいくらしとは？ ・安全，安心（住めるくらし， （便利なくらし）</p> <p>◎基地についてどう思うか？ ・事故や騒音があるので基地はないほうが いいが，基地で働いている人もい るので反対とは言えないけど，あぶない 言川練などはしほしくない。</p> <p>◎自衛隊祭で行われている「陸自祭」について どう思うか？ ・騒音がうるさいのではない か？ぎのわんの人などはヘリコ プターの音が聞こえただけで 不安になるらしい。</p> 	<p>学習課題</p> <p>・基地にかかわる人々の住みよいくらしについて考えよう。</p> <p>1. 住みよいくらしにするためには，基地をこれからどうしていけばよいと思いますか？</p> <p>・アメリカ軍に守られているゆゑもあるから，少しはあったほうがいいが基地について人が考えるのは，沖縄に基地が集中しているのは</p> <p>2. 今日の話合いの感想を書きましょう。わがごとく。</p> <p>・私は，けっこう基地があることに，あまりけつだんができなかったけど，ほかの人のいろいろな意見が聞けて，とても楽しかったです。「自分はこう考えているけど，ほかの人はこう考えているんだなあ」とわかりました。</p> <p>これからも，基地問題について考えていきたいです。</p> 
---	---

図2 ワークシートの例

(3) 児童の考えを共有化するための指導の工夫

一人一人の考えを拾い上げる手だてとして，KJ法的手法を使う。フリー百科事典「ウィキペディア（Wikipedia）」によると，KJ法とは，「創造性開発の技法の一つである。ブレインストーミングなどで出されたアイデアや意見，または各種の調査の現場から収集された雑多な情報を一枚ずつ短冊に書き込み，グループ化していく。その作業の中からテーマの解決に役立つヒントやひらめきを生み出していこうとするものである。」と示されている。

本研究では，それぞれの考えを短冊に書き，黒板に同時に張り出し，説明を加えながら分類する。それにより，学級全体で一人一人の考えを共有化し，円滑に児童の学び合いが進む。このような学習方法を使うことで，児童は他の児童の意見を認め，自分の考えを深める力がつくと思える。

(4) 発問の工夫

本研究における発問の工夫は、問題を解決する場面に応じて、児童の思考判断を支援することである。問題を解決する場面を、情報収集、情報の分類・整理、問題の発見・把握、予想・仮説、調査計画、事実の確認、意味づけ・関係づけ、吟味の8つに分類、発問の具体例を表1にまとめた。

表1 発問の具体例

分類	発問の具体例	留意点
情報を集める <児童の知識、これまでの諸経験などを問う。社会的事象と出会ったとき、児童は何をとらえたかを把握するための発問>	「 について、何か知っていることはありませんか」 「気づいたことはありませんか」 「 を見て思ったこと、考えたこと、わかったことを書きなさい」 「これは何でしょう」 など	児童の実態を踏まえ、生活体験にもとづいたことを聞く。多くの発表から自信を持たせ、意欲につなげる。
情報を分類・整理する <児童のとらえている事実の共通点や相違点などを問う。共有化するための発問>	「気づいたことをノートに書きなさい」 「同じだと思ふのはどれですか」 「違うと思ふものはどれですか」 など	個々の情報について、関連性を持たせる。
問題を発見・把握する <児童の疑問・発見を問う。学習課題をつくるための発問>	「あれと(疑問)思ふことは何ですか」 「 から何がわかりますか」 「 から学習課題を作ってみましょう」 など	関連性から生まれる疑問を引き出し、それをもとに、学習課題を設定する。
問題の予想・仮説を考える <児童の予想・仮説を問う。児童の考えを把握し、学習課題の妥当性を図るための発問>	「 をよくしていくには、どうすればいいと思いますか」 「 はどのようにして××になりましたか。予想してみましょう」 「なのは、どうしてだと思いますか」 など	学習課題の解決に向けた見通しを立てる。
調査計画 <児童がどのようにして解決(調べ、考える)しようとしているか(調べる目的・方法・まとめ方)を問う。調査計画を把握し、適切な支援をするための発問>	「調べる計画を立ててみましょう」 「 について調べるには、どのような方法がありますか」 「いつ、どこで、だれに、何を聞きますか」 「何を調べようとしていますか」 「どのように、まとめますか」 など	学習課題の解決に向けた具体的な計画を立てる。
事実の確認 <調査活動の結果や根拠を問う。学び合いの前に結果を共有化するための発問>	「調べたことから、どんなことがわかりましたか」 「分かったもととなるもの(資料)は、何ですか」 「さんの調べたことは××ということですか」 など	調査の結果を説明させる。特に結果と根拠をはっきりさせる。
意味づけ・関係づけ <調査活動の結果をもとにどう意味づけ・関係づけしているかを問う。学び合いの前に結果の根拠を共有化するための発問>	「調べてどんなことがわかりましたか」 「調べたことからどんなことが言えますか」 「そのように考える理由は何ですか」 「この考えのもとになったのは、どの資料ですか」 など	調査の結果・根拠から、さらに、関連性を持たせる。そこから、疑問を引き出し、さらに追究させる。
吟味 <学び合いの中で、他の考えと比較し、どのように吟味するか(しているか)を問う。学び合いを進めるための発問>	「自分の予想と比べてどうなりましたか」 「自分の考えの根拠は何ですか」 「 の意見を聞いて、どう考えますか」 「どうして意見が変わったのですか」 など	他の考えとの比較させ、多面的な思考力を伸ばすように留意する。自己の変容にも気づかせる。

以上のように、問題解決の場面に応じた発問の工夫を行えば、児童の思考を深めることができる。また、短冊、ワークシート、児童の発言などから、発問の効果をふり返り、改善を図ることができる。

3 沖縄の基地に関連する学習単元表

沖縄の基地は、教材として適していると考えられる。なぜなら、児童が継続して学び続けることができる教材だからである。現在、沖縄における基地は資料が豊富で調べやすく多様な立場で捉えることができるという特性を持っている。また、歴史を学習していく中で、その意味について、より学習が深まることも想定される。さらに、「平和とは何か」「国と国との関係はどうあるべきか」という根源的で、これからの社会を考える上で重要なテーマにまで児童の思考を膨らませることも可能であろう。そこで、学習展開に基地を位置づけ授業実践をすることが有効であると考え、沖縄県の基地に関連する学習単元表を作成した。

表2 沖縄の基地に関連する学習単元表(教育出版発行の教科書より)

学年	大単元名	中小単元名・ねらい	学習活動	基地との関連
5年	住みよい くらしと環 境	自然を生かしたくらし 「くらしへの願いは？」 日本の国土や気候条件の異なる地域の様子を具体的に調べ、国土の自然の特色や自然環境に適応してくらししている人々の工夫・願いをとらえることができる。	沖縄県と北海道宗谷地方に住む人々の抱える問題や願い(北方領土・米軍基地)について考える。	沖縄県の戦争の歴史(基地)や宗谷地方とロシア連邦の交流の歩み(北方領土)から、住みよいくらしとは何かを考える。
6年	新しい日本の国づくりを見つめよう	2つの戦争と日本・アジア 「50年かかった条約改正」 ノルマントン号事件をきっかけにした世論の高まりの中で、条約改正が成功するまでの経緯を調べ、日本が国際的立場を高め、国力を充実させていったことに気づくことができるようにする。	不平等条約の内容をふり返り、政府がこれを改正しようと努力してきた経緯をまとめる。	日米の「地位協定」について触れ、基地のあるべき姿について考える。
	戦争から平和への歩みを見直そう	アジア・太平洋に広がる戦争 「身近な地域と戦争」 お墓調べなどを通して、日本がアジア・太平洋の各地へ戦場を広げていった様子を調べ、それによって、アジアの人々や日本の兵士がどうなったかを考えるようにする。	地域の慰霊碑、お墓、戦跡、聞き取り調査などを行い、戦争の跡を調べる。	敗戦までの経緯を知り、なぜ、現在まで基地が存在するのかを知り、その意味について考える。
		「沖縄・広島・長崎、そして敗戦」 沖縄戦や広島・長崎への原爆投下などを調べ、戦争によって人々が受けた被害の大きさに気づき、その後日本が戦慄に至るまでの経緯をとらえることができるようにする。	沖縄戦の読み物資料や写真などを活用して、沖縄戦の激しさや悲惨さをとらえさせる。	沖縄が占領され、敗戦、そして、基地が建設されるまでを調べ、その意味について考える。
		平和で豊かな暮らしを目指して 「アジアの中の日本を見つめて」 日本が、アジアの人々とともに平和で豊かな暮らしを実現していくためにどんなことができるのか、国内外に残る諸問題や解決に向けた人々の活動を調べ、考えることができるようにする。	国内外に今なお残されている課題について調べる。	日本への復帰を果たした沖縄に今なお残る基地について調べる。
	くらしと政治を調べてみよう	憲法と私たちのくらし 「平和を守る」 「平和主義」について、その意味や具体的な内容を調べ、歴史の学習もふり返りながら、世界の平和を実現するための努力や取り組みの大切さについて考えることができるようにする。	平和への願いは、憲法にどう表されているか調べ、考える。	沖縄で行われている平和への取り組みについて調べ、基地との関連を調べ、その意味について考える。

授業実践

1 単元名 「住みよいくらしと環境」

2 単元目標

- (1) 日本の国土や気候条件の異なる地域の様子を具体的に調べ、国土の自然の特色や自然環境に適応してくらしている人々の工夫・願い(基地，北方領土)をとらえることができる。
- (2) 自分たちと地域の自然環境との結びつきに気づき，公害から健康や生活環境を守ることや，森林を守り育てていくことの大切さをとらえることができる。
- (3) 国土や地域の自然環境に関する写真や地図，統計などの資料を収集・選択し，自然環境と人々の生活や産業との関わりについて広い視野から考えることができる。

3 単元について

(本研究とかかわる中単元「基地にかかわる人々の住みよいくらし」に関する点を述べる)

(1) 教材観(こんな教材を使って)

本研究では基地に着目する。児童にとって基地にかかわる様々な問題は理解しがたく，解決するには非常に困難なテーマである。なぜなら，基地にかかわる人々それぞれに住みよいくらしがあり，それが一致するものではないからである。基地を取り上げた理由は，沖縄県の将来像を語るときに避けては通れないほど，その存在が，沖縄県の社会全体に大きな影響を与えているからである。基地を教材とした実践は，平和学習として数多く行われてきたが，今回は社会科の教材として実践する。この教材の学習を通して，沖縄の現実と向き合わせることで，社会的な思考・判断にかかわる能力を育むことができると考える。

(2) 児童観(こんな子どもだから)

事前のアンケートから，基地とくらしについて児童の意識は，以下のようなものである。「あなたは基地をどう思いますか？」に対して否定的な答えが 40 人中 18 人を占め，「沖縄県には米軍基地がありますが，あなたは，これについてどのように思いますか？」「沖縄県には自衛隊が配備されていますが，あなたは，これについてどのように思いますか？」では，基地の存在を容認する回答が多い。これは，基地についてのイメージは悪いものの，国防の面から必要であると考えている児童が多いといえる。また，「わからない」と答えた児童が 14 人と多く，学習することで基地への興味関心が高くなることが期待される。

次に，これまでの単元テストからみた本学級児童の社会的な思考・判断にかかわる問題については，正答率 85%以上の児童が 24 名，60%以上 85%未満の児童が 13 名，60%以下が 3 名であった。クラスの半数以上が，正答率 85%以上の得点を得ているが，実際の授業では，社会的事象への興味関心の不足から調査活動に意欲的に取り組めなかったり，学び合う場面でも，友だちの考えを認められなかったり，根拠に基づいた意見発表が十分に行えないなどの様子が見られた。

(3) 指導観(こんな指導をして)

本研究の指導にあたっては，以下のような点に留意する。調査活動については，実際に基地にかかわる人々を対象にインタビュー，電話，FAX，メール，インターネット，アンケート等の人と対話する調査活動を重視し展開する。児童は，基地にかかわる人々の多様な立場から調査を進める。教師は，児童が独力で調査が困難だと考えられる場

合は、関係者と連携を取り、適切な方法で調査させる。

また、KJ法的手法を使い、全員の考えを黒板に一斉に張り出し、対話による学び合いを展開する。そこでは、教師対児童、児童対児童、短冊対児童などの対話が行われ、思考を深めることができる。また、終末には、児童に基地問題の解決策について意志決定させる。解決策を自分で調べた中から見だし、表現し、他の意見と吟味する。よさを認めた上で、より望ましい解決策を選択する。このような思考の過程を重視する。

(4) 能力観(こんな力をつけたい)

多面的に事象を捉え、社会に積極的に関わっていかこうとする態度を育てたい。

インタビュー、FAX、電子メールなど多様な方法で人とのかかわり合いながら社会的事象を調べられる力をつけたい。

学び合いを通して、他の児童の意見を認め、自分の考えを深められる力をつけたい。

基本資料から必要な情報を読みとる力をつけたい。

4 指導計画

過程	学習活動	基礎的・基本的事項	評価
つかむ	1 オリエンテーション	国土の形や広がり，土地の様子などについて興味・関心を持つ。	【関心・意欲・態度】 国土の形や広がり土地の様子などについて興味関心を持つことができる。
調べ・まとめる	2 自然を生かした暮らし (1) 沖縄県と北海道宗谷地方の人たちの暮らし ~ (2) 基地にかかわる人々の住みよいくらし 沖縄県の基地にかかわる人々の多様な立場に気づかせ、これからの学習への興味関心を高め、学習計画を立てる。 沖縄県の基地にかかわる人々の多様な立場について調べ、ワークシートにまとめる。(県庁基地対策課の出前講座) 基地について、調べ学習をする。 沖縄県の基地について調べ地域の人たちが抱えるくらしの問題や願いについて考えることができるようにする。(本時) (3) 私たちのくらす国土 ~	日本の国土や気候条件の異なる地域の様子を調べようとする。 国土の自然の特色や自然環境に適応してくらししている人々の工夫・願いをとらえることができる。 調べた事柄について、分かりやすくまとめたり、発表することができる。 相互交流から多面的に社会事象をとらえることができる。 気候に特色のある地域のよさや問題、願いをとらえることができる。	【知識・理解】 国土の自然の特色や自然環境に適応してくらししている人々の工夫・願いを理解する。 気候に特色のある地域のよさや問題、願いを理解する。 【技能・表現】 日本の国土や気候条件の異なる地域の様子を調べることができる。 調べた事柄について、分かりやすくまとめたり、発表することができる。 【思考・判断】 相互交流から多面的に社会事象をとらえることができる。
	3 環境を守る (1) 公害ゼロを旨として ~	公害から健康や生活環境を守ることの大切さをとらえる	【知識・理解】 公害から健康や生活環境を守ること

調 べ る ・ ま と め る	(2) 森林と生きる 21 ~ 24 (3) 自然とともに生きよう。 25 ~ 29	ことができる。 森林を守り育てていくこと の大切さをとらえることが できる。 国土や地域の自然環境に関 する写真や地図，統計などの 資料を収集・選択する。 自然環境と人々の生活や産 業との関わりについて広い視 野から考えることができる。	の大切さを理解する。 森林を守り育てていくことの大切 さを理解する。 【技能・表現】 国土や地域の自然環境に関する写真 や地図，統計などの資料を収集・選択 することができる。 【思考・判断】 自然環境と人々の生活や産業との関 わりについて広い視野から考えること ができる。
広 げ る	4 地域の環境レポートを書こう・環境クロスワードを解こう 30	自分たちと地域の自然環境 との結びつきに気づく。 学習のまとめとして，地域 の環境レポートを書くことが できる。	【知識・理解】 自分たちと地域の自然環境との結び つきに気づく。 【技能・表現】 学習のまとめとして，地域の環境レ ポートを書くことができる。

5 本時の学習

(1) 本時の目標

住みよいくらしのために基地について学び合わせることを通して，多様な考えに気づかせ，一人一人の考えをより深めることができるようにする。

(2) 授業仮説

展開の場面で，発問の工夫やKJ法的手法を使い学び合わせれば，友だちの多様な考えに気づき，一人一人が考えをより深めることができるだろう。

(3) 準備 パネル 沖縄県の基地地図 ワークシート 短冊

(4) 本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点	評価(方法)
つ か む	1 沖縄県の基地について，これまでの学習を振り返る。	子どもたちの調べ学習の成果を押さえる。	これまでの学習をふり返ることができたか。(発表)
展 開	2 学習課題「住みよいくらしのために基地をどうすべきか」を確認する。 3 自分の考えを短冊に書き，黒板に貼る。 4 短冊に書かれたそれぞれの考えから学び合う。	調べ学習の成果と自分の考えを関連させて発表するように助言する。 基地の将来像について，どのような願いがあるか話し合う。	調べたことから考察を加え，発表できたか。(短冊・発表) 自分の考えや友だちの考えからよりよい解決策を考えていたか。(発表)
ま と め	5 基地にかかわる人々の住みよいくらしについて，今日の話し合いから感想をまとめ発表する。	多面的に事象をとらえるよさを確認する。	自分の考えをふり返ることができたか。 (ワークシート・発表)

結果と考察

検証 1

「人とかかわる調査活動を行えば社会的事象・調査活動への興味関心が高まる」について

【結果】本研究では、社会的事象・調査活動への興味関心を高めるために、人とかかわる調査活動を行った。人とかかわる調査活動とは、インタビュー、見学、ゲストティーチャーとの対話、アンケート、電子メール等により児童一人一人が様々な人々とかかわることを通して調査を進めていくことである。当初、児童は6つの立場(米軍、自衛隊、基地の周辺に住む人々、地主、基地の中で働く人々、県の立場)から調べ学習を始めた。その内訳は、米軍を調べた児童1名、自衛隊7名、基地の周辺に住む人々16名、地主6名、基地の中で働く人々2名、県の立場7名であった。



写真1 ゲストティーチャーとの対話

地主の立場については、児童では調整が厳しいと考えたので、教師が土地連合会へ連絡を取り、児童が土地連合会会長にインタビューできるように調査の場を設定した。基地の中で働く人々については、米軍・自衛隊・駐留軍等労働者労務管理機構の渉外担当者に取材を申し込んだが、対応が難しいとの理由で調査ができなかった。しかし、自衛隊や基地の中で働く人々については、自衛祭の見学、家族や親戚からの聞き取り、電子メールを使った取材など、進んで調査する児童もいた。また、多様な立場から判断している県の立場については、県庁基地対策課担当者をゲストティーチャーとして教室に招き、基地について対話する時間を設定した(写真1)。

これらが社会的事象・調査活動への興味関心に与える効果を、図3、図4から検証する。

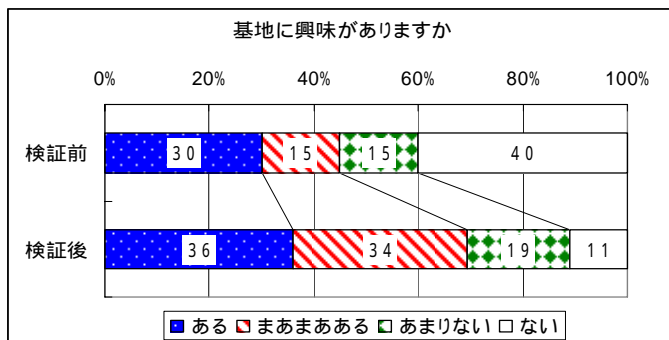


図3 基地に関する意識調査

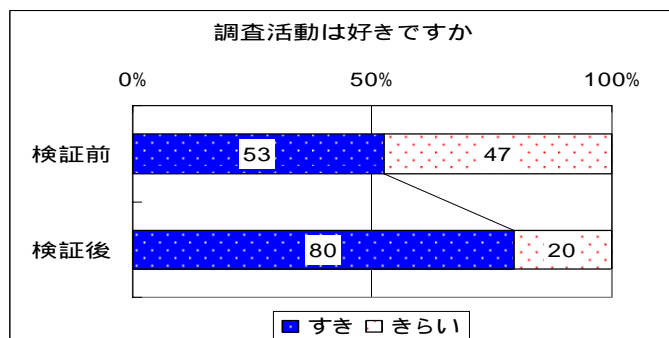


図4 調査活動に関する意識調査

【考察】まず、社会的事象への興味関心について考察する。図3から、「基地に興味がある」と答えた児童が45%から70%に増えたことがわかる。基地について、家族や近所の人々にインタビューし、専門的な知識をもつ人々と触れ合い、得た知識を、自分たちの言葉で表現し学び合った結果として、学級全体の基地に対する興味関心が高まったことは大きな成果であると考えられる。

次に、調査活動への興味関心について考察する。図4からは、「調査活動が好きだ」と答えた児童が53%から80%に増えたことがわかる。さらに、児童の感想では、「調べ学習が楽しいから、社会が楽しくなった」「調べ学習などで人に

聞いたり触れ合うから社会が好きになった」等の記述が見られた。これらから，多様な立場の人とかかわる活動を取り入れることで，児童の調査活動に対する興味関心が高まり，今後の社会科学学習への取り組みにも期待できるといえるだろう。

このように人とかかわる調査活動を取り入れることで，児童の社会的事象(基地)・調査活動に対する興味関心が高まったと考える。

検証 2

「K」法的手法を使い，問題解決の場面に応じた発問を工夫して，対話型問題解決学習を展開すれば，一人一人の考えを学級全体で共有化し，児童の思考を深めることができる」について

【結果】本単元においては，一人一人の考えを学級全体で共有化し，児童の思考を深めるために，K」法的手法を使った対話型問題解決学習を実践した。具体的には，中単元「基地にかかわる人々の住みよいくらし」の学習展開の中で，人とかかわる調査活動をもとに，児童の考えを短冊に書き，学級全体で共有化するために黒板に一斉掲示した。そして，短冊について児童に説明させながら分類し考えを出し合うことで，他の児童の考えを認め，多様な考えに気づき自分の考えを深めるようにした。また，中単元を通して問題解決の場面に応じた発問を工夫した。表3，表4から，K」法的手法と発問の工夫の効果について，図5，図6からK」法的手法を使った対話型問題解決学習についての児童の意識について検証する。

表3 児童の感想 : ワークシートより

- ア 今までは，騒音などのことを考えていて，基地はない方がいいと思っていたけど，今日AさんやBさんの意見を聞いて，「守ってくれそう」という言葉が印象に残り，私も守ってくれそうだなと思いました。
- イ 私は最初，基地は断然あった方がよいと思っていたけれど，県の立場，地主の立場，基地の近くに住む人の話などを聞いて，考えが変わってきました。とても難しい問題です。日本政府に頑張ってもらいたいです。
- ウ 今日の話合いで，いろいろな理由で基地があってほしい，なくなってほしいと思っている人がいることがわかりました。私は，前，基地があることに反対していました。けれど話し合いを通して，私たちの周りには基地が必要だということはわかりました。

【考察】本研究では，学級全体に児童一人一人の考えを共有化する手だてとしてK」法的手法を用いた。対話型問題解決学習の学習展開に沿って考察する。

まず，人とかかわる調査活動から児童一人一人が学習課題「住みよいくらしのために，基地をどうすればよいか」に対しての自分なりの考えを持つ。それを短冊に記入して黒板に張り出す。貼る位置で自分の立場を表し，児童がそれぞれの考えを視覚的に共有した(写真2)。

そして，教師は，表1の 事実の確認， 意味づけ・関係づけの発問で，児童の考えの共有化・思考の深まりをねらった。そのために，「基地があったほうがよい」とする考えの児童にそれぞれの考え・根拠を確認し，意味づけ・関係づけをさせた。同様に，「基地がないほうがよい」「どちらともいえない」とする児童の順に発表をさせた。このような順序にした理由は，「基地」という教材を取り上げたからである。つまり，基地にかかわる人々には様々な立場があり，簡単に結論を出せる問題ではないからである。



写真2 短冊掲示の様子

その結果，表3のア，イ，ウの感想から，自分の考えが他の児童の考えから影響を受け，変容したことが捉えられた(下線部)。この変容は，短冊という形で自分の考えを整理し，学級全体に

説明を加え提示することで、児童が互いの考えを認めたから起こったのではないかと考える。さらに、児童の感想からは、みんなの考えがよくわかるという面から「カードでやると、白黒はつきりするから、仲間分けの方法は好き」や「カード分けはカードを見ながら質問できていたのでよかったと思う」などのKJ法的手法のよさが捉えられた。

しかし、今回の実践において課題がでてきた。短冊記入の際の指導である。短冊に記入された文字が小さく、全児童が短冊の内容を把握するには至らなかった。そこで、今回は教師が児童に短冊の内容をつなぐ発問をして授業を展開したが、児童同士の対話やつぶやきを引き出し、意欲を引き出すことは十分でなかった。この点は今後も継続して研究していく。

表4 アンケート、短冊、ワークシートをもとに作成した検証前・検証後の変容の様子

児童	事前(あなたは基地をどう思いますか?)	短冊(調査活動後の考え)	ワークシート(対話型問題解決学習終了後の考え)
A	フェスティバルの時は楽しいけれど、騒音などの問題もあるからどちらとも言えない。	命、国を守る仕事をしている場が基地であり、あった方がいいと思うが少し本土に移設した方がもっといいと思う。	基地は、ある方がよいと思うが、やはり、被害が大きい。 <u>本土に移設しようと思っても、移設先の住民に被害が出るから、移設はむずかしい。</u> 政府、アメリカ、沖縄は、たくさん話し合ってほしい。
B	なんかかっこいいからまあまあ好き。	日本の安全のためにあった方がいいけれど、もう少し本土に移してほしい。	日本はアメリカに守られているので、あった方がいいが、沖縄に集中しすぎているので <u>もっと本土の山の方へ移せば、本土の人もいやじゃないしいいとおもう。</u>
C	ヘリが家の周りを飛んでうるさいのであまり好きではない。	沖縄が守られているならあったほうがいい。	基地は騒音や墜落事故などがあり、基地がない方がいいと思うかもしれませんが、よく考えてみると、 <u>基地をなくしたり、ほかの県に移したりすると、その県は、迷惑がかかったり、なくすと、職業をなくしたりするのであった方がいいと思いました。</u>

次に、表4から児童の変容について考察する。「基地があったほうがよい」「基地がないほうがよい」「どちらともいえない」児童の考えを確認し、意味づけ・関係づけをしたことで、学び合いの方向が、沖縄県の基地を本土に移設した方がいいという方向に向いてきた(写真3)。そこで、移設先の立場に立つ発問で、揺さぶりをかけた。これは、児童に他の立場で考えさせるための発問である。この問いが、児童の変容(表4)を引き出した。特に、下線部は、学び合いの中で生み出された考えが表れている部分である。



写真3 学び合いの様子

A児は、基地がある上でのメリット(国防)と基地被害を考え、本土移設を考えるが、移設先の住民の被害を考え、どうしたらよいかわからなくなっている様子が見られるが、授業後にとったアンケートでは、「自分たちでも県や政府に手紙を送ったりして、解決してくれるように働きかける。」と答えている。この実践を通して、社会にかかわっていこうとする態度が育まれたと考える。B児は、特に移設先の住民の被害については、発問に大きく影響を受けたと捉えられる。「本土の山の方へ移せば、本土の人もいやじゃないしいいと思う」と、移設先の住民の生活も考え、人に迷惑のかからないところに移設すればよいという解釈をしたと考えられる。C児は、「基地がない方がいいと思うかもしれないが、よく考えてみると、移設された県は、迷惑

がかかったりなくすと職業をなくしたりするのであった方がいい」と考えている。学び合いを通して、移設先の住民や基地の中で働く人々を意識するようになり、考えが深まったと考える。

ただし、本研究は基地に関連する学習の導入段階であると考え。児童にはこれからも知見を広げ、基地について柔軟に継続して考えていくことが重要であるという認識を持たせた。

このように児童の変容の様子からも、学級全体に児童一人一人の考えを共有化する手だてとしてKJ法的手法を用いて問題解決の場面に応じた発問の工夫を行えば、児童の思考を深めることができると捉えられる。

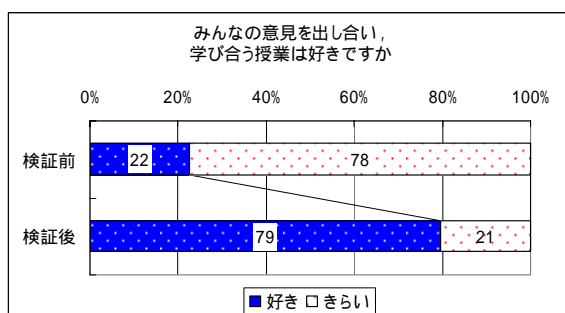


図5 KJ法的手法を使った対話型

問題解決学習に関する意識調査

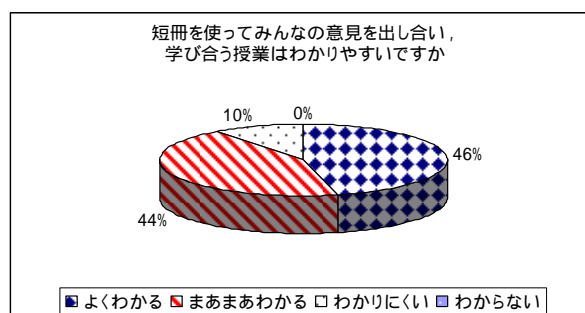


図6 KJ法的手法を使った対話型

問題解決学習に関する意識調査

図5、図6からは、児童がKJ法的手法を使った授業についてどのような意識を持っているかが捉えられる。図5からは、KJ法的手法を使い発問を工夫した対話型問題解決学習を展開したことにより、学び合う授業が好きだと答えた児童が学級の22%から79%に増加した。図6からは、KJ法的手法を使った対話型問題解決学習が「わかりやすい」と答えた児童が学級の90%を示した。このように、児童の情意面からも、KJ法的手法を使った対話型問題解決学習が効果的であると捉えられる。

これらのことから、KJ法的手法を使い対話型問題解決学習を展開すれば、一人一人の考えを学級全体で共有化し、他の児童の意見を認め自分の考えを深められる力がつくと考え。

研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 対話型問題解決学習の展開において、KJ法的手法を使い発問を工夫することが、一人一人の考えを学級全体で共有化し児童の思考を深めるのに効果的であることがわかった。
- (2) 基地について人とかかわる調査活動をすることで、児童の社会的事象(基地)・調査活動への興味関心を高めることができた。

2 今後の課題

- (1) 発問の工夫の継続した研究
- (2) 基地にかかわる単元表の教材化、検証

主な参考文献と引用文献

- 小学校学習指導要領解説 社会編 文部省 日本文教出版 1999年
 社会科授業が対話型になっていますか 安野功著 明治図書 2005年
 社会科技術を活性化する技術 有田和正著 明治図書 2004年
 発問の工夫例 鹿児島県総合教育センター指導資料 2005年